

《研究ノート》

生活美学研究の今後(3)

—生活美学基礎理論確立の試み—

生活美学研究所 森 田 雅 子
情報メディア学科 非常勤講師 和 泉 志 穂

1. 目的 —はじめに—

2014 年より「生活美学研究の今後」と題して研究ノートを執筆している。まず「生活美学研究の今後(1)」では多田流生活美学研究の継承と転回を図ることを目的として、第二次世界大戦後を中心とした日・欧米の生活美学の系譜を 7 つの系統に分けてみた。新機軸として、生物界において、美の享受を進化の要因であると提唱するカティア・マンドキ(Katya Mandoki)の説を紹介した。彼女は日本ではほとんど知られていないようだ。今回は「生活美学研究の今後(2) —五感と第六感—身体感覚についての試論—」(2015)、今回は「生活美学研究の今後(3) —生活美学基礎理論の確立の試み—」(2016)と少しずつ深められたと思う。何よりも講義「生活美学論」の熱心な受講者の皆さんとの研究交流については篤く感謝している。

最近非常に感銘を受けたのが中沢新一の『カイエ・ソバージュ』(2010)である。他にも中沢新一が「もの」と「こころ」の統一へ(河合俊雄 ほか 2016:1-38)で勧めるフリードリッヒ・ハイエク(Friedrich A. Von Hayek)の『感覚秩序(*Die Sensorische Ordnung: Eine Untersuchung der Grundlagen der theoretischen Psychologie*)』(1952/2006)を読んだ。ここでは、生物、とりわけ人間が、感覚器官の求心的な情報伝達とリアリティーの揺らぎを察知し、中枢の判断器官により遠心的な指令伝達し対応する身体の動作・行動により、外界認識し、適切に対応していく過程をみごとに論証している。発生した意識の覚醒から絶命による消滅まで流動的な均衡状態(ホメオスタシス)を保ち、外部世界との交換を続けるのが生命体の営みである(Hayek 1952/2006)。つまり、その外部世界との交換の中で、生命体にとって避けるべきものと、求めるべきものとを識別していかなければならない。それによって生命を維持し、子孫を残すのである。「美」とは求めるべき感覚あるいは価値、「醜」とは避けるべき感覚あるいは価値であり、「美」「醜」の間を死までさまようのが人間の生きる過程ではないのだろうか。神経生理学的な、感覚的な、そして心理的秩序からも同様の仕組みに支配されていると考える。この点については 3 章 4 節以降で詳細を述べたい。

また今回は第 2 章以下で説明するように、実証美学的な、定量分析的なアプローチをデータの一部で和泉志穂(情報メディア学博士)と試みた。生活美学基礎理論なるものの輪

郭を少しでも確定したいところである。

1.1 「生活美学研究の今後（１）」（2014）

さて「生活美学研究の今後（１）」ではまず、戦後から今日（2014年）に至るまでの「生活美学」という用語がつかわれている文脈をデータベースから122件抽出し、7種に分類した。その際、生活美学という言葉のなりたちについては触れていなかったが、現時点ではAesthetics of Everyday Lifeの翻訳語であると類推している。抽出できた範囲内では戦後からの使用のみ確認できている。戦前戦中を乗り越え、戦後になり噛みしめた言葉なのだろうか。この点については、さらに調べる必要がある。少し長きにわたるが、前回の論旨の一部、生活美学の7種の「定義」を振り返ってみる。

ここではまず身体感覚に刺激を与えるもの全てを審美的観賞の対象とし、生活に潤いを与え、生活質感を高めるための行動指針となるものを生活美とするという観点をまず再確認しておく。官能こそが否応なく誕生から死に至るまでの我々の道標となっているからである。しかし、まず、便宜上、嗅覚、味覚などに美の市民権を与えない、という「古典的」原義の出発点を示し(①)、そこから身体感覚が完全なる美の市民権を得た到達点(⑦)を示す。その他 借用義、派生義として②～⑥の意味を区別してみた。特に③～⑥は重複、会合するニュアンスがある。

- ① （生活）美学は存在しない（否定）。
生活は混沌、未分化で構造が不明確である。また嗅覚、味覚は好悪や利害（幸福感・安心・不安・恐怖・忌避）の対象であり、美的評価の対象にならないとする。
- ② 生活美学を生活学と美学の会合とする（会合）。
生活を定義し、美を定義して会合する領域を特定する。
- ③ 生活美学を人生における处世術、作法、身だしなみと結び付ける（範）。
- ④ 生活美学を衣食住を中心とした消費経済の枠組で捉え、デザイン消費と結び付ける（型）。
- ⑤ 生活美学を生活の豊かさと潤いを求める生活行動の目的とする（喜び）。
快楽享受の構図を用いる。
- ⑥ 生活美学を生活行動のリズムを整え、新たな出発に軌道修正する岐路の指標（分岐点）を特定し利用する生活の知恵の源泉とする（悟り）。
- ⑦ 美学を生活美学と同値とする（身体感覚）。
感覚器官を利用して動物（人間）の生活環境の偵察、再現、ナビゲーションを通じて生きながらえる。これらのサバイバル行為は、一連の刺激に対する直接的で基本的な認知「エステーシス（aesthesia）」行動の基盤により成り立つ生活美学と同一とする。

マンドキの美学は⑦に示される定義を展開し、さらに物語、ゲーム、情報などの要素にも独自の美的価値を認めている（2007）。最新刊 *El indispensable exceso de la estética* では遺伝子・細胞レベルの活動から生態系、人間文明のすべてのレベルにおいて美的現象

には過剰・豊饒の要素が絶対不可欠であるとしている。またカントの提唱する美的判断の無関心性をデザイン資本主義萌芽期における偽善と断じている (Mandoki 2013 : Orbis Primus)。欧米では消費社会の成熟化・生活様式の多様化とともに、生活美学 (Aesthetics of Everyday Life) は非常に注目されている。マンドキラを中心として、ポストモダンの欧米で継承され、身体感覚を重んじ、アンチ=古典的美学の立場をとる「先進的」生活美学の系譜とその基礎理論の妥当性を、広く日本も視野に入れながら、包括的に検証する。

1.2 「生活美学研究の今後 (2) 五感と第六感 ー身体感覚についての試論」(2015)

次に「生活美学研究の今後 (2) 五感と第六感 ー身体感覚についての試論」では講義「生活美学論」で展開した主要な五感に注目して美感、美意識、生活文化、の関係性を考察した。受講者の学生との研究交流、授業の一環として、「美醜採集録」を行った。「美醜採集録」では日誌形式を指定し、記録調査を 118 名規模、3 ヶ月間実践している。この日誌形式はアラゼブスキー (Andy Alaszewski) が *Using Diaries for Social Research* (2006) で導入した日記による質的調査手法を応用したものである。

研究成果として「美」の出現は視覚を通じてもたらされる場合が多い、人間関係でのフロー、感情が高揚した状況で感じる場合が多いとわかった。「美」「醜」のできごとの場合も視覚が支配する状況が優勢であった。人間関係 (家族、交友関係) が絡んだり、通勤・通学時間帯移動中、例えば電車の車内で発生する事例が多いこともわかった。「醜」の体験があつてこそ映える「美」の体験であり、存在感が増すという認識も得られた。

しかし「美醜採集録」が大胆な結果となったのも、感覚を限定しなかったからではないかと反省し、感覚を限定すれば、さらに明確な結果を得られると考えた。そこで今回「生活美学研究の今後 (3)」では、視覚など比較的明確に理論化、抽象化できる感覚ではなく、嗅覚に限定し、コメント (言説・比喩) による認識の質的分析の役割に期待した。

さらにここで日常生活も含めて、なにげなく去来するできごと、ハプニングを解説する。ハプニングとは、原義は事件、出来事である。Weblio のオンライン辞書によれば、さらに「主に米国で用いられる 劇などでのハプニングは、時に観客をまき込んだの即興的な筋の展開」であり、ハプニングを以下のように解説している。

1950 年代から 1970 年代前半を中心に、北米・西ヨーロッパ・日本などで展開された、ギャラリーや市街地で行われる非再現的で一回性の強いパフォーマンスアートや作品展示などを総称するのに用いられる美術用語

本論で生活者として感覚を感知した瞬間や状況を、敢えて「非再現的で一回性の強いパフォーマンスアート」に酷似するとして、感覚出現をハプニングと劇的に定義づけたい。その理由は、それらの感覚を実感するそれぞれの刹那で、生活者の一日の流れが新たに無限の展開をみせる可能性を含んでいるからである。そこでは意識の流れに感覚が交差し、瞬間的に思考が静止する点、そしてさらには意識の流れが次の行動へ分岐する分岐点とし

て機能しているとの仮説「感覚出現は生活行動の分岐点となることがある」を検証したいからだ。

2. 「生活美学研究の今後（３）—生活美学基礎理論確立の試み—」の調査について

鼻は吸う空気と安全な食べ物とを嗅ぎ分ける—においの「美」「醜」はサバイバルの道を示すと言っても過言ではないのではないか。嗅覚出現は一日一日の生活時間の流れでどんな役割を持っているか、この調査で見極めていく。日誌形式の調査により時系列の変化を読み取ることができる。またコメント（意味づけ・比喩）、ランキング（価値づけ）の記入により生活質感への介入がどの程度と評価しているか分析することが可能になる。嗅覚出現については第３章１節の定量分析と第３章２節～４節の質的分析で比較検討していく。

2.1 質的調査による検証を実践 —日本における生活美学研究の転回をめざして—

デニス・Ｄ・ヴァスクル (Dennis D. Waskul) とフィリップ・ヴァニーニ (Phillip Vannini) は生活美醜学研究ともいえる臭いに関する調査を行った (2008 : 53-71)。多様な人種構成で 20 代から 50 代までの 23 名のカナダの大学生ボランティア被験者に依頼して、生活の中の匂いに関する事案について 日誌記録を分析した。結論としていえば、女性の被験者の方が圧倒的に嗅覚や臭い、香りに対して敏感で、日常生活の中で嗅覚を刺激する事象に遭遇している。しかし男女ともに、日常の社会生活で行われる対人接触の中で、異臭・体臭・強い香水などを極めてシビアに評価することがわかった。つまり嗅覚の反応は極めて言語化されづらく、説明しがたい不条理な要素もつきまとうが、個人の日常の社会生活の管制・危機回避機能の制御に役立っていると言える。つまり、野性や命の根っこに近く、逆に言説による分析が行き届かない感覚器官は、それだけ深くサバイバルに関わっているのではないか。身体感覚に刺激を与えるもの全てを審美的観賞の対象とし、生活に潤いを与え、生活質感を高めるための行動指針となるものを生活美とするという上記の生活美学の定義に該当すると考える。官能こそが誕生から死に至るまで否応なく我々の道標となっているからである。

2.2 調査の経緯

「生活美学研究の今後（３）」では、「美醜採集」の対象を嗅覚出現に限定した。それから、それから前回「生活美学研究の今後（２）」では日誌形式を取りながらも、時系列での変化、意識の流れを汲みとることができなかったのも、その反省も含めて、記入形式で NHK 放送文化研究所の生活行動の調査を下敷きにした（３章１節で詳述）。６月 10 日（金）から 7 月 7 日（木）までの期間に日誌を記入し、「美」「醜」のランキング 1 位～5 位までを示すよう協力してもらった。６月 10 日（金）～６月 16 日（木）についてはエクセルシート記入の日誌データ分析詳細を第３章１節で述べている。

調査協力者 138 名により、記入日数 4 日間から 30 日間以上、また記入方法も不統一な所があった。例えば、日々の日誌記入について、においの発生時を 15 分単位で記入するように要請したが、その印象の「美」「醜」をその都度記録するようには求めなかったので、ランキングに記載された嗅覚出現・ハプニング以外は、後から再確認するときに、被験者の「美」「醜」の価値判断に曖昧さが生じた。これは基本的なミスであると認める。また 138 名のうち 12 名は、日誌記入や「美醜採集」の総括が不完全で、126 名のデータとなった。

基本的な依頼内容は、①嗅覚を得た時点を日誌のチャート（時刻目盛式調査票）に記入し、嗅覚出現の状況について詳細を解説したコメントを記録することである。そして②数週間後、嗅覚出現のランキングを構成することである。126 名の「美」「醜」（快・不快）ランキングを検討し、少し偏りはあるものの、「美」「醜」体験の全体像を示唆すると判断した。被験者に「美」「醜」のにおいのランキングを 1 位～5 位まで指定することとし、ランキングの理由を比喻・色などを使って説明するように求めた。個人情報を持定するようなデータは公表しないことを前提に、データで研究交流するということに同意してもらい、日誌記録の情報を共有をさせていただいた。結果として 1,232 件のランキング、つまり 620 件の「美」、612 件の「醜」の状況についての描写を得た。

言説に基づいて世界を読み解くことにはそれなりの限界がある。言説の構築した世界は、常にリアリティーにより正体を暴かれ、修正されるであろう。しかし、リアリティーもまた、言説による是正と定義を待たなければならない。

2.3 においの「美」「醜」という考え方

まず、ここで改めてにおいを美しい、醜いと分類できるかについて考える。たとえば味については美味などというが、うつくしい味とはいわない。この美味というのは おいしいの意味である。不味いというが、みにくい味とはいわない。また嗅覚は味覚に最も類似した、同様に粘膜を介して化学的成分を受容する感覚とも考えられるが、香りといい、「うつくしい におい」とはいわない。また臭いというが、「みにくい におい」とは言い習わさない。しかしここでは「美」「醜」を、嗜好上の好悪度（好き嫌い）を表すものとして捉え、「美」は快感度が高い特徴を表し、「醜」は不快感がより高い特徴を表すと定義しておくことにした。「美」はその場に止まりたくなる、食べ物なら食べたくなる、心なら幸福感で癒され、あやかりたくなる要素である。「醜」はその場から逃げたくなる、空気なら息を止めたくなる、心に恐怖と怒りを催す要素である。

3. 調査結果

生活質感を決定する日常生活の中の「美」「醜」の感覚についての基礎理論的枠組を定立するため、まず第 3 章 1 節一定量的手法による分析を得られたデータの一部に対して行う。残りのデータについては日誌調査、と 1,232 件の「美」「醜」ランキングについては第 3 章

第4週（6月30日（金）～7月7日（木））の4週間のいずれかまたは複数週で調査を行った。
回収は、7月8日（金）に行った。

3.1-5 調査対象

武庫川女子大学に通う20～21歳の女子学生138名。有効回答²⁾120名（87.0%）。今回報告する第1週の有効回答は82名（59.4%）となった。

3.1-6 生活行動分類

生活行動の分類については、前述のNHK放送文化研究所の分類を参考に、被験者からの出現頻度がより高いものを考慮しながら、次のように分類した（表1参照）。

表1 生活行動分類の内訳

大分類	中分類	小分類	具 体 例
必需行動	睡眠	就寝	
		起床	
	食事	朝食	
		昼食	ランチは昼食に含めた
		夕食	
	身のまわりの用事	洗顔・歯磨き	洗顔、歯磨き、手洗いを含む
		トイレ	排泄
		入浴	入浴、シャワー、朝シャンプー
		着替え	着替え、ファッションコーディネート
		化粧	メイクアップ（基礎化粧品以降）、香水、日焼け止め
		ヘアセット	ヘアセット、入浴後のドライヤーも含めた
		美容	ボディクリーム、基礎化粧品、アロマ、ネイルなどを含む
	療養・静養	病院	医者に行く、治療を受ける
拘束行動	アルバイト	接客	飲食提供、レジ、販売など
		作業	調理、血洗い、買い出しなど
		掃除・ゴミ出し	排水溝掃除、店舗掃除、ゴミ出しなど
		更衣・休憩	更衣、休憩時間の飲食（まかないを含む）など
	学業	授業・学内活動	授業、学校行事、クラブ活動、部活
		学外活動	教育実習、就職活動、課題など
	家事	炊事	食事の支度・後片付け、食器洗い
		掃除	ゴミ出し、部屋の掃除など
		洗濯	洗濯、洗濯物干し、取り込み、たたみ、アイロン掛け
		買い物	食料品・衣料品・生活用品などの買い物
	通学・通勤	家事雑事	ペットの散歩、その他
		移動（電車）	
		移動（バス）	自動車も含む
		移動（自転車）	
		移動（徒歩）	
	社会参加	帰宅	
		社会参加	地域の行事への参加、ボランティア活動
自由行動	会話・交際	お茶	カフェでの飲食、おしゃべりなど含む
		デート	パートナーとの時間共有
		サークル	サークル活動
	レジャー活動	スポーツ	体操、運動、各種スポーツ
		行楽・散策	趣味・習い事、鑑賞、観戦、遊び、岩盤浴など
	マスメディア接触	電子媒体	テレビ、ラジオ、インターネットの視聴
		紙媒体	新聞、雑誌、マンガ、本を読む
	休息	休息	休憩、自室での癒し、特に何もしていない状態
		間食	おやつ、夜食
その他	その他・不明	その他	上記のどれにもあてはまらない行動

（NHK放送文化研究所の分類を参考に著者作成）

²⁾ 1日でも有効な回答のあった人。

1) 必需行動

個体を維持向上させるために行う必要不可欠性の高い行動。睡眠、食事、身のまわりの用事、療養・静養、からなる。

2) 拘束行動

家庭や社会を維持向上させるために行う義務制・拘束性の高い行動。アルバイト関連、学業、家事、通学、社会参加、からなる。

3) 自由行動

人間性を維持向上させるために行う自由裁量性の高い行動。人と会うこと・話すことが中心の会話・交際、積極的活動であるレジャー活動、マスメディア接触、心身を休めることが中心の休息、からなる。

3.1-7 定量的手法の調査の結果と考察

3.1-7-1 被験者人数と嗅覚出現件数の関係

回収した調査票を確認したところ、こちらが意図した入力方法になっていない被験者が多数存在した。そのため、1件ずつ確認をしていき、1フィールドに複数の項目のフラグが立っていたものの中で、各々の生活行動などが把握できなかったものは除外した。一方で、コメント記入などがあり、こちらで生活行動や「美」「醜」などが把握できる状況にあったものに関しては分割作業を行った。

この点は今後の課題であり、調査実施側の意図が被験者により正確に伝わるような伝達方法、そして、PC操作が苦手な被験者への初歩的な入力方法を記したテキスト配布の必要性を感じた。また、どのようなPCスキルの被験者でもデータ入力がしやすい調査票となるよう、入力規制などを盛り込んだシステムの構築が必要である。

以上のように、回収した調査票の整理には膨大な時間が必要となったため、今回は約3週間を使用して第1週のデータのみを精査した。

その結果、普段の生活行動を営む上で感じた嗅覚に関する感覚情報1件を1フィールドとして整理したところ、7日間で1,974件の嗅覚情報が収集された。各日の被験者人数と出現した嗅覚出現件数、そして、その「美」「醜」の内訳を表2に示す。今回、「美」「醜」の判断がつかなかった嗅覚情報に関しては、「その他」としてカウントを行った。

「その他」の中で多かった項目として特記すべき事項としては、ペット（犬）に関するものがある。肉球などの香ばしい匂いには「美」のフラグが、犬の口臭や雨に濡れた匂いには「醜」のフラグが立っていた。一方で、犬と一緒に戯れたにおいや散歩に関するものは「美」「醜」どちらか不明のため「その他」に入れている。また、被験者により「美」「醜」双方にフラグ立てがなされていた項目として、天候に関するもの（雨や太陽の匂い）、ビールなどのアルコールのにおいがある。その大半が「醜」と評価されつつも、「美」と評価する被験者も存在したため、日記の状況から判定しにくいものは「その他」に入れている。

表2 第1週の被験者人数と嗅覚出現件数の推移

項目	日付	6月10日 (金)	6月11日 (土)	6月12日 (日)	6月13日 (月)	6月14日 (火)	6月15日 (水)	6月16日 (木)
被験者数(人)		47	50	48	52	50	56	61
嗅覚件数(件)		267	279	270	278	247	306	327
美(件)		188	196	193	189	181	202	221
醜(件)		69	72	74	86	63	88	90
その他(件)		10	11	3	3	3	16	16
平均嗅覚数(件)		5.7	5.6	5.6	5.3	4.9	5.5	5.4

(著者作成)

得られたデータを基に、被験者数と嗅覚件数の関係を調査すべく、相関関係の算出と検定を行った。2変量データの相関(類似性の度合い)の強さを示す統計学的指標として、相関係数(ピアソンの積率相関係数: Pearson product-moment correlation coefficient)がある。相関係数の算出は式1に準じ、MS ExcelではCORREL関数で算出した。

$$\text{相関係数}(r) = \frac{\text{XとYの共分散}^3)}{\text{Xの標準偏差} \times \text{Yの標準偏差}} = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2}} \cdots (\text{式1})$$

相関係数は-1から+1までの値となり、0の場合はその2変量間に相関関係はなく、±1の場合は完全な相関関係と判定できる。事象により多少基準は異なるが、 $\pm 1.0 > r > \pm 0.7$ ならば高い相関が認められ、 $\pm 0.4 \geq r > \pm 0.2$ ならば低い相関が認められることとなる。

ただし、求めた相関係数から相関の程度を比較・評価できるのは、無相関検定を行い検定結果が統計的に有意である場合、かつ、信頼区間(95%ないし99%)を求め、下限値が一定の基準を超えている場合となる。標本数による有意限界値は、「r表(相関係数検定表) correlation coefficient r table」を用いた。

まず、被験者人数と嗅覚件数の間に相関関係があると考えられるため検定を行った。その結果、統計的に有意に高い正の相関が認められ($r = .892$, $p < .01$)、被験者人数が増加すると嗅覚出現件数が増加することが裏付けられた。

次に、嗅覚件数のうち「美」と感じた件数と「醜」と感じた件数の間に相関関係があるか検定を行った。その結果、統計的に有意な相関は見られなかった($r = .748$, n.s.)。つまり、「美」の嗅覚件数が多く出現すると「醜」の嗅覚件数も増加するというような関係性は無く、日によって人間の嗅覚の感度に変化するのではなく、別の要因があると推察される。

3.1-7-2 嗅覚出現件数と気象データの関係

3.1-7-1の結果から、嗅覚出現件数の背景には、我々の生活に身近な条件として気象との関係があるのではないかと考えた。そこで、嗅覚出現件数の推移と気象データ(平均気温、

³⁾ 偏差の積和の平均

最高気温、最低気温、平均湿度、最小湿度、日照時間、平均風速) との関係について検定を行った。検定には、国土交通省の設置機関である気象庁が観測している気象データを用いた。観測地点は全国にあるが、被験者の生活行動範囲に密接している京阪神地区の中でも、上記の気象項目を全て観測している大阪⁴⁾ を参考にした。一覧を表 3 に示す。

表 3 気象データ（大阪）の経日変化一覧

項目 \ 日付	6月10日 (金)	6月11日 (土)	6月12日 (日)	6月13日 (月)	6月14日 (火)	6月15日 (水)	6月16日 (木)
平均気温 (°C)	25.6	25.4	24.1	22.7	24.8	25.5	22.5
最高気温 (°C)	31.5	30.3	28.0	26.4	29.1	30.2	24.7
最低気温 (°C)	20.5	21.6	21.0	20.7	21.0	21.9	20.7
平均湿度 (%)	63.0	66.0	76.0	81.0	68.0	72.0	87.0
最小湿度 (%)	39.0	46.0	58.0	64.0	52.0	52.0	69.0
日照時間 (h)	13.6	6.8	1.9	0.4	3.9	6.4	0.0
平均風速 (m/s)	2.2	2.2	2.9	2.9	1.6	1.9	2.2

(著者作成)

表 3 と表 2 を基に、気象データと嗅覚出現件数（全体、「美」、「醜」）の経日変化一覧の相関関係を調べた結果をまとめたものを表 4 に示す。

表 4 気象データと嗅覚出現件数（全体、「美」、「醜」）との経日変化による検定の結果

	全 (件)	美 (件)	醜 (件)
平均気温 (°C)	-0.40	-0.43	-0.57
最高気温 (°C)	-0.49	-0.54	-0.59
最低気温 (°C)	0.18	0.10	0.13
平均湿度 (%)	0.65	0.65	0.77 *
最小湿度 (%)	0.52	0.54	0.67
日照時間 (h)	-0.31	-0.35	-0.48
平均風速 (m/s)	0.03	0.01	0.30

*: $p < .05$

(著者作成)

統計的に有意な検定結果が示されたのは、平均湿度と嗅覚（醜）との間のみであり、統計的に有意に高い正の相関が認められた ($r=0.77, p<.05$)。

そこで、Y 軸に平均湿度 (%), X 軸に嗅覚（醜）出現数 (件) をプロットした散布図⁵⁾ を図 2 に作図した。図中の垂直線と水平線は各軸の平均を示し、楕円は 2 変量正規分布の 95% 確率等高線である。

以上のことから、平均湿度が高くなるにつれ、嗅覚の中でも「醜」という感覚が強く引

⁴⁾ 緯度：北緯 34 度 40.9 分、経度：東経 135 度 31.1 分、標高 23m で、気象台や観測の区分にあたる。観測所の規模により、観測する項目が必ずしも全て網羅されているわけではない。

⁵⁾ 滋賀大学情報処理センター中川雅央助手のシステムを利用。

き起こされていることがわかる。つまり、「醜」に関する嗅覚件数は、その日の平均湿度の上昇に大きく関係しているといえる。

また、90%の確率まで精度を下げるならば、表 4 でグレーにした最小湿度も「醜」に関する嗅覚件数として相関関係が認められる傾向にあるといえる。今後、残り 3 週間のデータを解析することで、より精度の高いデータが得られると考えている。

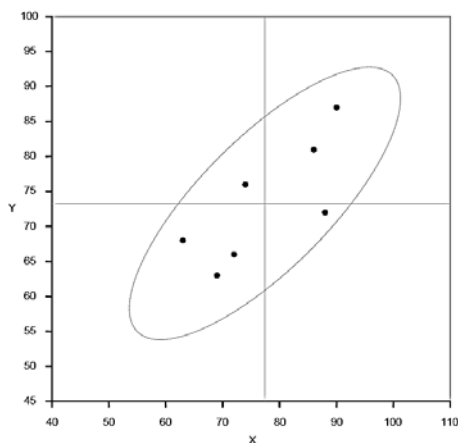


図 2 平均湿度と嗅覚（「醜」）出現件数との散布図
（中川雅央氏のシステムを基に著者作図）

3. 1-7-3 嗅覚出現件数と生活行動との関係

3. 1-7-2 では、「美」「醜」の嗅覚出現に相関関係のある気象条件が平均湿度であることが判明した。そこで、さらに被験者がどのような生活行動を行っている時に「美」「醜」の嗅覚が出現するのかその実態を調査した。

図 3 は、生活行動パターンと「美」「醜」の嗅覚出現頻度の推移を示した図である。ここから、被験者が「美」と感じる生活行動は食事や入浴であることがわかる。

食事では、朝食、昼食、夕食のいずれも「美」と感じる匂いの出現頻度は高いが、昼食だけは朝食や夕食に比べその出現頻度がやや低くなっている。その要因として、学生の場合、教室や食堂で複数人での飲食を行うため、その香りが混ざったことによる不快感があげられる。入浴に関しては、「美」の嗅覚しか出現せず、シャンプーやトリートメント、石鹸などの香りがその要因である。特に、被験者にはお気に入りの香りがあるようで、それを使用することで、就寝時間までリラックスできている。また、枕にその香りに移ることで、起床時に「美」と感じる嗅覚にまでこれらの香りは波及していた。

食事や入浴の次に高い出現頻度となったのが、間食、洗顔・歯磨き、起床である。

このいずれも、先述した食事や入浴の要因と同じ要因で出現している。間食は言わずもがな飲食物に関するものであるが、起床時はコーヒーや焼き立てパンなど朝食の香りにより目覚めている被験者が多かった。一方で、洗顔・歯磨きなどでは、石鹸や香り付き歯磨き粉が要因としてあげられていた。

その他の出現頻度が高いものの要因も、食べ物の香りか、柔軟剤などのように付加価値として香りをプラスしている商品の使用によるものが多かった。

一方で、「醜」と感じる臭いの出現頻度で最も高かったのは、電車での移動中に感じるものであった。異性に対する嗅覚は特に敏感になっているようで、体臭や加齢臭、汗の臭いが「醜」として最も多くの件数があげられていた。同性でも、強すぎる香水の香りなどは不快に感じていた。また、車内の香りとして、シートに染みついた臭いや、雨や満員電車のように湿気を感じる密室空間になると不快に感じるようである。

生活行動の大分類でみると、必需行動中は「美」を感じる事が多く、拘束行動中は「醜」を感じる事が多いという傾向がみられた。つまり、人間の心理的な作用も嗅覚のとらえ方や反応に少なからず影響があるのではないかと考える。

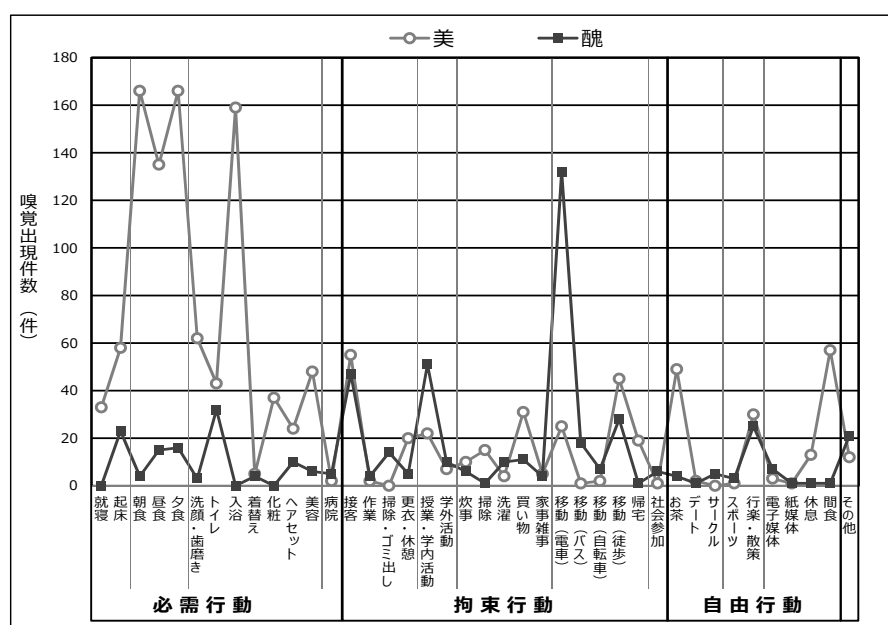


図3 6/10～6/16までの日記を用いた生活行動別「美」「醜」の嗅覚出現件数頻度
(中川雅央氏のシステムを基に著者作図)

3.2 6月10日(金)～7月7日(木) —「美」のにおいのランキングの質的分析—

「美」とされたにおい、つまり香りのランキングについて概要を述べる。ここでは6月10日～7月7日の日誌記録、コメントの総括として提出された各被験者のランキングとコメントを分析している。

126名により挙げられる5位までの620件の「美」の対象物の中で、香料が含まれる生活財は257件挙げられていた(アロマ43件、香水42件、化粧品9件、入浴剤22件、ボディケア30件、制汗料5件、シャンプー33件、トリートメント11件、柔軟剤26件等、消臭剤2件、芳香剤7件、洗剤5件、歯磨き1件)。これらはいわゆる生活臭をカモフラージュするために使用されたり、身づくろいなどの作業を快適にするためのものである。注目すべきは、人工香料がかなりの割合を占めていると考えられることだ。

自然界（花4件、木7件、森2件）はそれに対して13件のみで、他の気象条件や自然現象では計23件であった。内訳は雨7件、太陽は干してもらった布団のにおいにからめて14件、風は2件であった。まずは直接の住環境で接する自然界に対する関心は薄いといえよう。

違うジャンルの香りでは食べ物に関連するにおいが144件ほど挙げられていた。多いのはコーヒー（33件）、紅茶焼き立てのパンなど（47件）、ポップコーン（18件）、ケーキ（14件）、菓子（16件）、カレー（13件）、焼き肉（8件）、味噌汁（5件）などであった。

ベストランキング1位のところを調べるとアロマ関連の美感は69件、食事関連は38件、自然界7件、その他6件、不明3件などとなっている。必需行動の食事関連が高いのはわかりやすいが、それよりもっと美的に役立つものがあるということだろうか。生活臭を和らげる、社会生活のための身づくろい機能の庶民的な生活財もトップとなっており、高級ブランドだけで独占しているわけではない。言い換えれば、これらの香りは好ましく感じたものであり、癒される、あやかりたい、止まりたい、装いたい、食べたい、という動機づけの要因となるものであると考える。

3.3 6月10日(金)～7月7日(木)―「醜」のにおいのランキングの質的分析―

同様に126名により「醜」とされた全体612件の臭いのランキングについて述べる。ワーストランキング1位33件で、しかも全体の5位までのランキングで圧倒的な件数118件を見せるのは電車という状況であった。通勤・通学時間帯で非常なストレスとなっているようだ。これにリンクするのが駅や駅トイレという場所で、全体で駅26件、トイレ（公衆トイレなども含む）が30件の言及があった。

生ゴミはワーストランキング1位では電車に次いで2位で32件、全体では74件ほどであった。生ゴミワーストランキング1位の人たち46名を調べると、香水12件よりアロマ18件とアロマに対してやや「美」の感受性が高く、逆に香水やアロマを「醜」として認識した事例（香水16件、アロマ3件）も散見された。これは生ゴミワースト以外の人たちに比べるとセンシビリティが鋭いと考えられる。

汗がワーストランキング1位に挙げられたにおいの中で3位で20件、全体件数は生ゴミより多く88件あった。他にも汗の関連の苦情で香水40件、体臭13件、加齢臭19件、腋臭6件という状況となった。

次に言及が多いのはタバコ臭で全体65件であり、ワースト1位では8件でも、他の2位～5位全体ランキングで57件の苦情を発見できた。歩きタバコなど、通勤・通学路上での邂逅についてもコメントが寄せられている。

後は「醜」全体ランキングをみると、梅雨期に関連して雨31件、湿気11件、生乾き洗濯物13件水回り20件（台所1件、キッチン3件、風呂3件、排水4件、下水4件、ドブ5件）カビ21件、であった。浮彫になってくるのは消費生活や保健衛生に不可欠な水回り、排水、生ゴミ処理を核とした衛生領域と、移動手段である電車などを中心とした驚異的人

口密度を持つ密室空間での不快な領域、また夏の日本人が生活する温熱環境や空気感に関しての不快感の言及があった（空調 3 件、エアコン 8 件、換気 10 件、クーラー 11 件）。

特に反発があったのは閉じられた空間で、換気が悪い所、人混みの多い満員車両などでの反発についての説明が多かった。「美」「醜」の 1 位、2 位ランキング一覧をみると表 5 のような結果である。「美」のにおいてはアロマ、香水、コーヒー、パンの香りが好まれている。「醜」のにおいては電車、ゴミ、汗、タバコの臭いが中心となっている。「美」の方がどちらかという分散しているが、「醜」の対象はかなり集中して身体起源のものが票を集めていたので、ある意味では普遍的な「醜」のテーマ性が表れていると示唆される。

表 5 6 月 6 日～7 月 7 日 日誌
「美」「醜」の 1-5 位ランキング 1, 232 件中のトップ 2

美	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
1 位	アロマ 14 件 香水 14 件	シャンプー 10 件	コーヒー 8 件	香水 11 件	パン 14 件
2 位		アロマ 9 件	ボディーケア 7 件	パン 10 件	コーヒー 7 件 アロマ 7 件

醜	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
1 位	電車 33 件 ゴミ 32 件	電車 29 件	汗 20 件	電車 26 件	電車 13 件
2 位	汗 20 件	汗 25 件	電車 17 件 タバコ 17 件	汗 15 件	タバコ 11 件

（データより著者作成）

以上 126 名による「美」「醜」の 1 位～5 位ランキング 1, 232 件について総括した。

3.4 6 月 10 日(金)～7 月 7 日(木)の日誌記録の質的分析

現段階 128 件の日誌を閲読している。第 3 章 1 節でも言及したように、記入方法の指定に問題があり今後見直す必要があることを確認する。以下に生活行動別に総括する。

3.4-1 必需行動について

必需行動についてののにおいのハプニングは「美」の範疇においては圧倒的な件数である。ランキングにはあまり現れないが、日誌記録ではその中でも朝食に関する感想は多い。「ご飯の炊けるにおい」、「パンの焼ける香ばしいにおい」、「コーヒー」、「紅茶」、「フルグラ」、「卵焼き」、「味噌汁」のにおいが漂ってくると、料理してくれる母親の立ち働く姿などを起床前にぼんやりと想像し、でも幸福に浸っている。就寝前、就寝時はアロマを炊いたりする人もいる。また、睡眠に入る状況で「無臭」という記述が何件かある。これは嗅覚に関する意識がシャットダウンされている状況を回顧的に確認したということであろう。まさにその感覚のブランクの状態から覚醒し、新たな一日の活動に向けて活性化させるのが、朝食のさまざまな香りであることになる。

もう一つ特記に値することは身づくろいについてである。日本人のお風呂好き、清潔好きは有名ではあるが、まさに少数の例外を除き、殆どの被験者が一日の終わりの入浴についての香りの体験を記している。さまざまな香りのついた入浴剤、石鹸、シャンプー、トリートメント、ボディーソープ、ボディークリームなどの使用により高い満足感を得ていることがわかる。また、翌日起床時の残り香もエンジョイしている。また就寝・起床時の歯磨き時のミントの香りは好ましいものとして捉えられている。それだけでなく、通りすがりの人、接触のあった人々の柔軟剤、シャンプーのにおいなども嗅ぎ分けて、楽しんでいる。

就寝時・起床時で注目すべき記述は「布団の匂い」である。鬱陶しい梅雨のたまの晴れ間を狙って、母親が甲斐甲斐しく干してくれた「太陽の匂い」のする布団にくるまり、枕に顔を埋めて寝るのである。この布団の匂いには母親の愛情を感じているに違いない。また「太陽の匂い」として好評を博している柔軟剤もあるようだ。

3.4-2 拘束行動について

拘束行動では、移動の交通手段として用いられる交通機関の車両内、あるいは通学路・通勤路上で遭遇する におい についての記入が多かった。各交通機関の車両内では汗、制汗剤、香水、体臭・加齢臭以外にも強いにおいのする飲食物の摂食、タバコ臭さ、酒臭さに加え、空調のカビ臭さなどについては「醜」の範疇としての分類となった。特に満員の車両の場合、至近距離で数十分以上など、一定時間止まることになるため、かなりの精神的苦痛として捉えられている。通学・通勤路上では喫煙の副流煙、自動車の排気ガス、ゴミ収集車との遭遇などが不快な要因として挙げられる。また、自由行動ではあるが、大型施設（競技場、ライブ会場）周辺でも似たような記述が見られたが、同質のにおい、例えば「汗」であっても、どちらかという熱気、盛り上がりとして、美的に評価される傾向があった。他に、逆に移動中での美の範疇に属するものとして、「花の香り」だったり、「焼き立てのパン」、「アロマ」が挙げられている。

さらに拘束行動の中でも、自宅やアルバイト先などの「ゴミ出し」などが「醜」のランキングでトップの一つとなっている。各施設などでゴミ置き場などに貯め置かれたゴミ類の腐敗臭が耐え難いとしている。あるいは飲食店などのグリストラップの清掃では、排水管に濾過した食用油や食べかすを取り除く作業もある。一方ではこのような悪臭を、単に排除すれば済む孤立した外的要因として捉えることには終始していない。過剰な消費生活がもたらす廃棄物の集積が原因で発生する悪臭に対して、まさに人為的原因のある悪臭として改革意識が高まり、このような臭気の発生原因（＝過剰な消費）に対しては、方向性は見えていないが、是正していかなければならないと結論づけている。

3.4-3 自由行動について

拘束行動の一環として移動中に感じるにおいについてはすでに述べた。逆に自由行動の

旅行中であると嗅覚は、新しい環境要因、例えば「潮」のにおい、「砂」のにおい、などを
感じて、記録している。もちろん、ご当地の食材だったり、飲食は格別なものとして感じ
られ、感度もアップし、記入回数も増え、また「美」の範疇となることが多いと感じる。
日常生活の中では自然環境は気にも留めていないようだ。お迎えなどの解放された瞬間
に車窓から夏の夜を匂う、などの詩的な感覚も浮かぶ。

そうはいつでも梅雨期の天気、気温、湿度などの気象条件には繊細に反応している。特
に屋外の「雨」、「黴臭さ」、や「コンクリート」、「歩道」、「路面」、「建物」などの湿気を含
んだにおいは不愉快という指摘が多い。特に多人数の車両内、施設内では、多様な体臭が
混在し、過敏となっている。これはあくまでも印象であるが、若い女性は、年齢、性差な
どによる体臭の変化に非常に敏感に反応すると考える。

ペットに対しては余り記述がなかった。ペットの犬が「香ばしいにおい」とするもの、^{くさ}「臭
い」ので、ラベンダーのアロマを炊いたりしている状況などが報告された。猫の匂いに関
しては全く記述はなかったようだ。上記のように、旅行中、物見遊山中、などでは多少自
然環境に対する興味が高まるが、普段は冷めている。日常生活に連続したお出かけ中のウ
インドウショッピングでは香りに反応していることを意識している。代表的なものでは「ア
ロマ」「化粧品・香水」「コーヒー」「パン」「焼肉」などのにおいを嗅ぐと、欲求が覚醒し
たと記述している。

大枠では常に地球上の生活であるから、自然環境、生活環境枠内の問題であるはずだが、
上述のように人間以外の自然界の生き物、例えばペットに関する言及も数えるほどしかな
い。私たちの周囲にも生息している樹木、草木、山、海、森林が殆ど日常生活の評価対象
から欠けていると感じる。学生の現実世界といえ、その場の空気感、天候、通学路、教
室、電車、バイト先、友人、自分の部屋、化粧品、洗濯、着衣、入浴、食事で構成されて
いる。それ以外はコメントの対象となっていない。これは少しアンバランスな状況である
と憂慮している。

3.4-4 生活領域の境界線とにおい付けによる生活行動の美化と儀礼化

生活領域から生活領域へ移動して、新しいテリトリーに到着すると、新しい嗅覚出現・
ハプニングがあることが多い。これで身体感覚をスイッチオンして、異なる生活領域にエ
ントリーしたことを確認するのではないか。例えば授業を受けるために登学し、「昼食休憩
の教室の匂い」を認識する。学内の空気中には柔軟剤や香水などのにおいづけされた無数
の道が通っている。それらの発生源であるモノや個人と邂逅したり、残り香を気取る。通
学路ではよく同じお店から「焼肉のにおい」がしたり、近所の「夕食の支度の匂い」がし
てくる。自宅に到着すると「玄関のにおい」「部屋のにおい」が待っている。生活者の必需
行動や拘束行動、自由行動は多数の生活領域を移動することを必要としている。生活領域
はバーチャルなものから、移動して出入りするリアルな領域など、様々であるが、にお
いは生活領域の^{しるし}徴となるとときがある。そして生活者の生活行動は周期的な繰り返しを持つ

ていることが多いので、生活行動が安定している人は、同一サイクルで類似の嗅覚出現を見せる。

その代表が、冒頭述べた必需行動である。例えば食事に関しては、自分の好きな香りのする食材を選ぶと、美感が高まる。また入浴時などの石鹸、入浴剤などは自分の好みで選べる。

ディフューザーを使用するときも、自分の好みの香りを使う。嗅覚出現・ハプニングをそういう意味では管理し、自分の幸福感、美感を高めるのである。これは生活行動の美化、儀礼化の役割と解釈したい。

また、テリトリー全体を包み込み、特徴づけるその場の空気において、空気感に反応することがある。立入る時に、その場においてを感知する。嗅覚で認識することにより、場の力関係であったり、空間的構造を掌握する。それはモールの通路、通路に並ぶ店頭、人の流れ、空気の流れ、風の道が運ぶにおいてに対する反応があるからである。嗅覚のハプニングは生活の流れや構造を形作る。

その最たる事例が自宅で行われる入浴、洗面、朝食の生活行動に見られる。これらは実質的、実用的な内容（例えば衛生上、栄養上）の目的のある必需行動であると同時に、身体感覚にとって催眠、あるいは覚醒的な役割を持つ重要な嗅覚的ハプニングとなっている。つまり一日の物語をしめくくったり、物語の始めを告げる際に感覚の美化（浄化）を行い、儀礼を執り行うのである。

4. 仮説の検証 —における「美」「醜」の判断— 生活行動と嗅覚出現（ハプニング）

においてはエアロソル状態で空気の流れにのり、あるいはモノや動物がエアロソル粒子を身に纏い、分散されることによって運ばれるとされる。アリストテレスは植物も動物と同様食し、子孫を増やすことから、魂を持っていると考えた。においが拡散してくることは、その生き物が「存在」しており、魂を持ち、自然界の生態系の循環に繋がっている証である。

例えば におい というもので私は次の友達存在に気が付いた。側溝に近づくと甘く、臭い腐敗のにおいがする。狸が交通事故に遭って側溝で死んでいる。無数の蛆虫が湧いて怒涛のごとく軀をむさぼっている。次の日に行くと、もう軀を包んでいたベージュの毛皮はもうしぼんで、骨と取り残されてしまっている。

「美」「醜」の価値判断が状況によって逆転することも興味ある事実である。周囲を威嚇するキツイ香水、タバコ、ガソリン、酢、他人の食事（たべごと）などはそういう事例のようである。そのように自分のテリトリーに対する侵入者や侵入要因を識別することもできるわけである。

人間は通常一定の周期で複数の生活領域にまたがる生活行動の繰り返しを行う。においはあるモノや生物、ある複合的シチュエーションに固有のもので、テリトリーの境界線を

示す役割を持っている。嗅覚ハプニングは身体感覚を活性化したり、警戒レベルを高める役割があるはずである。この空気をこの人たちと共有して、吸っていいのか、この食べ物を食べていいのか。サーバイバルをかけていること、衛生上の要因が大きいこと、食事と関連しているのが今回のにおいの美醜の判断から現れていると考える。

生活領域と言えば、基本的には住居が核にある。自宅は「醜」ランキングでは全体で 32 件、「美」ランキングでは 57 件でキーワードとしても明確に表れているが、言及されなくとも、様々な生活行動（特に必需行動）は自宅での嗅覚ハプニングを伴うのである。従って人にとっての嗅覚の起点は住処である。嗅覚は人に連れだって生活のために外出し、そして帰宅した人の移動に寄り添い、安全なる通行を確保する。就寝時のコメントとして「無臭」というコメントが散見されたように、帰宅後の心身同ものリセットに役立つよう、嗅覚は認識の整備を行い、記憶を再確認し、それぞれの日々の物語をしめくくるのである。

冒頭でハイエク（Friedrich A. Von Hayek）の『感覚秩序』（1952/2006）に言及し、生命体の感覚器官の仕組みについて次のように述べた。すなわち意識の覚醒から絶命による消滅まで 流動的な均衡状態（ホメオスタシス）を保ち、外部世界との交換を続けるのが生命体の営みであり、外部世界との交換の中で、生命体にとって避けるべきものと、求めるべきものとを識別していかなければならない。それによって生命を維持し、子孫を残すのである。「美」とは求めるべき感覚あるいは価値、「醜」とは忌避すべき感覚あるいは価値であり、「美」「醜」の間を死までさまようのが人間の生きる過程ではないのだろうか。本論で冒頭に仮説として掲げた、「感覚出現は生活行動の分岐点となることがある」は定量分析・質的分析の調査結果により立証されたのではないか。加えて「嗅覚出現により生活行動を意味づけ、構造化することができる」とも結論付けられることができたと考える。感覚の受容による記憶の集積、価値判断ということが前提となっている。

宮沢賢治の物語世界の動物というのは、人間がかつて持っていた、しかし忘れ去ってしまった感情、智恵、価値を伝えてくれる。動物は人間よりさらに真実を抉った道徳的な美醜の価値を帯びているのである。たとえば、宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」には動物がでてくる。下手くそなセロ弾きのゴーシュは、指揮者の楽長というよりは、毎晩水車小屋にやってくる動物たちと交流するうちに、本来の自分を取り戻すのである。たとえばカッコウは芸術とは「飛翔」「生きること」であると教える。タヌキは銜いを捨て去り、「無心」「童心」に回帰することを教える。ネズミは「愛」、ネコは「夢」が芸術の核心にあると教えてくれる。

このように、賢治の世界では人間は動物に感情と知恵を贈られる立場なのである。また、命の間断ない激しさこそ芸術の本質であると教えるカッコウ（命）、愛の大切さを教えるネズミ（愛）、とらわれの無い童心を伝えるタヌキ（無心）、夢を与える必要性を訴えるネコ（夢）という物語世界の守り神に支えられて、ゴーシュの芸術性が復活する。言い換え

ば、動物にそれらの宝物をプレゼントされてゴーシュは人間として再出発するのである。

我々はゴーシュのように、日々メタフィジカルな戦いを展開しているわけでもないかもしれない。しかし軽微な生活実践上の判断であっても、決断し、行動していかなければ、生命の維持に問題が出てくる。その日常生活上の些細な、なにげない選択から人生の大きな決断に至るまで、判断するときと言え、**「美」**の価値を贈ってくれる魂、物語、モノたちとの出会いを招来することにより行使しているのではないだろうか。

できうることなら数多くの**「美」**にあやかり、**「醜」**をうまくかわし生活の質感をコントロールしていく、そういう人間という生き物の営みの姿を少しは明らかにできたようなら幸いである。今回は、定量分析と質的調査（日誌調査）の手法を併用した分析で、生活美が基本となる生活質感について、より実証的に考察する試みとした。言説に基づいて世界を読み解くことにはそれなりの限界がある。言説の構築した世界は、常にリアリティーにより正体を暴かれ、修正されるであろう。しかし、リアリティーもまた、言説による是正と定義を待たなければならない。

今回は嗅覚出現に関するコメント（意味づけ・比喩）、ランキング（価値づけ）の記録分析により感覚出現への生活質感への介入を評価した。次回はさらに手法を開拓し、**「美」****「醜」**の基準についての明確な基準の策定に挑戦する。記憶と物語性というものが嗅覚と結びついて**「美」****「醜」**の判断に作用する状況が少しずつであるが、見えてきた気がする。どうやら嗅覚の意識的な、儀礼的な行使、においづけという習性は人の日常生活とは切り離せないもののようだ。